

昭和四年三月十五日（第三種郵便物認可）  
令和七年二月五日（発印刷納行本）

（毎月一回五日発行）

第九十八卷

第二号

第一一五三号

吉田苞竹創刊



令和七年（2025年）  
二月号



公益財団法人  
書壇院

公益財団法人書壇院は、書道の研究、教育及び普及に関する事業を行い、書道芸術の高揚と精神の修養、人格の陶冶を図ることを目的としています。



二玄社 中国法書選④  
P.41  
P.42

卒史一人鮑

君造作百石

吏舍功垂无

窮。於是始。□。

(漢字臨書規定 8頁)

課題

半切 鮑君よりは始まで(十五字)  
半紙 造作百石吏舍(六字)



## 交流会と錬成会

江川蒼淵

ここ数年、地域交流会と錬成会を行っています。

かつては、東北地区活性のため、書壇院の先生方の協力を仰ぎ、児玉潤松先生と共に秋田での錬成会を何年か続け、それなりの効果がありました。その後、新潟地区で、書壇院の関係者による新潟会の立ち上げと、錬成会を近県の人達を含めて行っています。

また、書壇誌での報告記事などでご存じかと思いますが、東海地区の浜松や半田、福島の会津、岩手の二戸などで開催しました。

話は前後しますが、地域の先生方のご協力を頂き、多少なりとも書壇院の活性化につながれば、との思いがあった次第です。現在、横山理事長の下で育成事業として財団の重要な事業となっております。

他に、新たに審査会員、院友を対象とした漢字講習会が行われております。私も後半、二回程参加させていただきました。私は、近年体調不良で散歩さえ辛いときがあり、そんな時はユルユル手抜き体操で気を引き締めております。一回めの参加は、自分の作品を持参せず、皆さんの作品の批評のみしておりました。しかし、皆の熱気が伝わり、逆にこちらが元氣になり、二回めの参加には、私も二、三点書いてくると約束をしたほどです。二回目の参加に向け、十尺二点と八尺を一点、ほぼ徹夜状態で仕上げ持参いたしました。十尺縦書きを三年ぶりで書けたことは驚きであり、皆さんの熱気に感謝です。

交流会、錬成会、研究会など指導者側からみれば、理念の違いが大小あるかと思いますが、書に向かう心は同じ方向と信じております。多くの仲間と共に頑張りましょう。

## 令和七年 書壇 二月号 目次

表紙Ⅱ書壇院蔵 鄭道昭書 東堪石室銘

題字 集鄭道昭書

古典研究……………表2

巻頭言……………江川蒼淵…1

同人参考手本 丸川瑞江・瀧澤橙雪…2

跳龍・紫陽・泰雲・有紅

富田幽蒲・矢崎美咲

### 競書課題

漢字規定……………長澤幽篁…5

かな規定……………佐藤節子…6

南画規定……………大久保楓紅…7

漢字臨書規定 細田秋僊・関原玉樹…8

かな臨書規定 星野静代・松原静香…9

日本文……………加藤玲香・小林未瑛…10

篆刻入門……………益満丁壺…11

『書道讀本』吉田苞竹著……………12

上位・極位・雅位試験規定……………14

第九十一回書壇院展速報……………17

第一四八回審査会員遊苑……………17

新潟地区および近県条幅錬成会……………18

### 第一一五三回選書

写真・批評……………19

成績発表……………32

三月五日締切課題予告……………47

書壇院日記……………49

バーコード券申込書……………50

応募規定・競書出品方法……………51

書壇院ギャラリー第二二〇回展（企画展示）……………表3

古典道遙……………表4

高橋彩綏……………表4

丸川瑞江書

浮雲著眼不留從  
 獨與梅花共過冬

瑞江書

—劉應時句—

浮雲 著<sup>キテ</sup>眼<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>留<sup>メ</sup>蹤<sup>ヲ</sup>獨<sup>リ</sup>與<sup>ニ</sup>梅<sup>ニ</sup>花<sup>ニ</sup>共<sup>ニ</sup>過<sup>ゴス</sup>冬<sup>ヲ</sup>

(翰墨自在)

瀧澤橙雪書

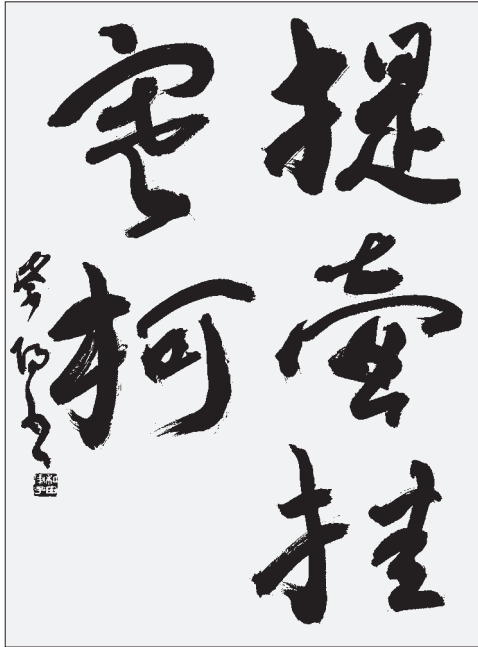
牆角數枝梅凌寒獨自開  
 遙知不是雪為有暗香來

橙雪書

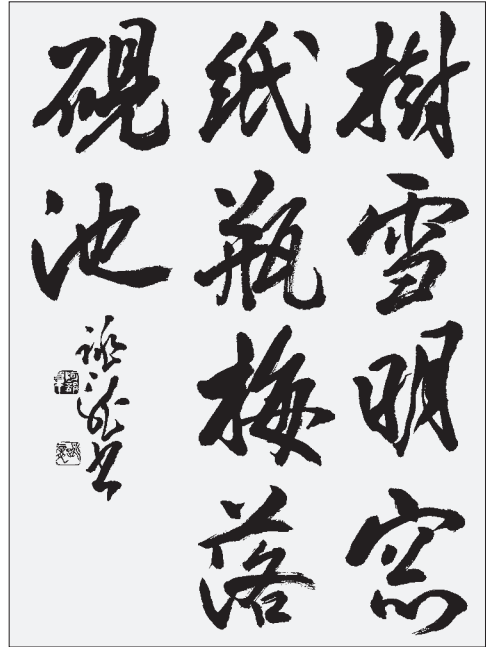
—王安石詩—

牆角數枝<sup>ノ</sup>梅<sup>。</sup>凌<sup>ギテ</sup>寒<sup>ヲ</sup>獨<sup>ニ</sup>自<sup>ニ</sup>開<sup>ク</sup>遙<sup>カニ</sup>知<sup>ル</sup>不<sup>レ</sup>是<sup>ニ</sup>雪<sup>ノ</sup>為<sup>ナリ</sup>有<sup>リ</sup>暗<sup>ニ</sup>香<sup>ノ</sup>來<sup>ル</sup>

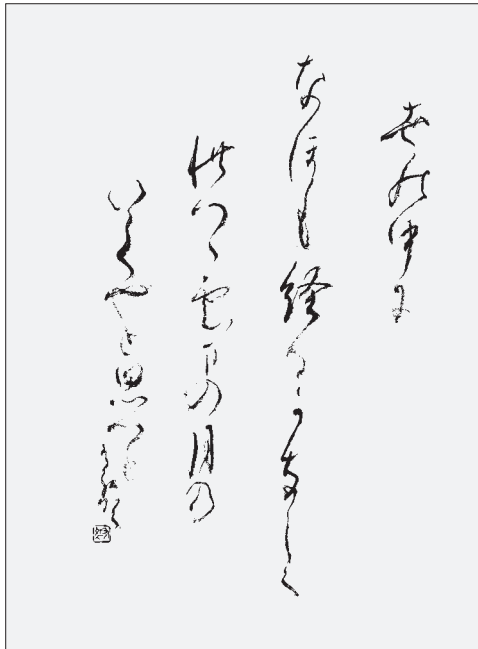
(墨場必携歷代絕句選)



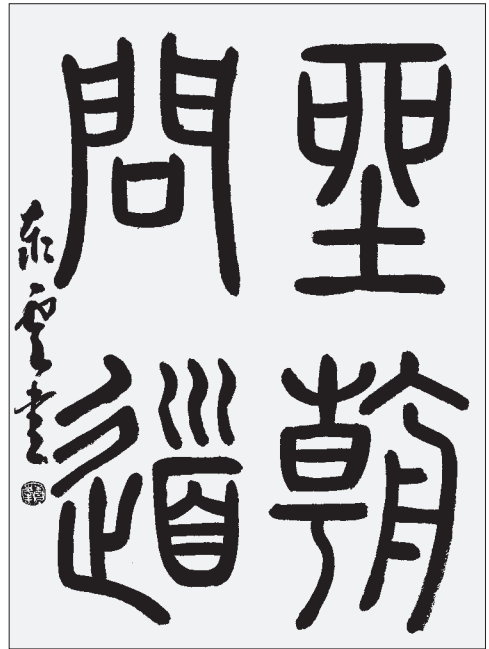
和田紫陽書



阿部跳龍書



池澤有紅書



野口泰雲書

同人参考手本

2尺×6尺額用

富田幽蒲書



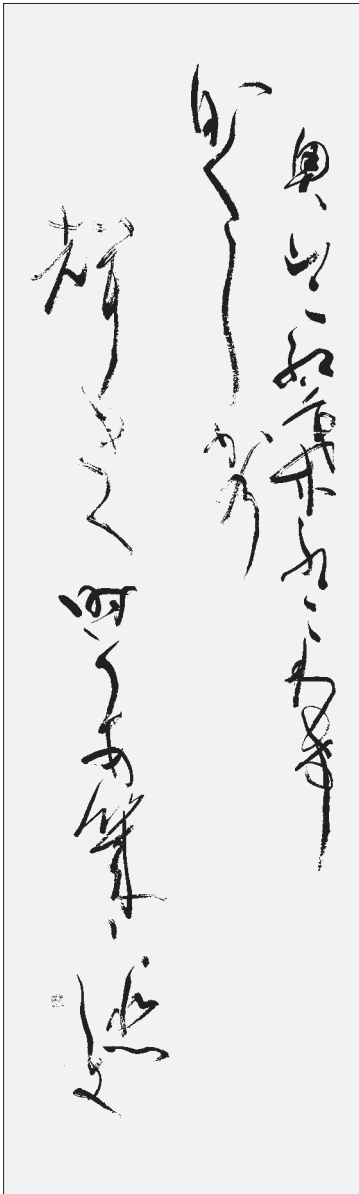
—詩経—

鳶飛<sub>トビ</sub>魚躍<sub>ウツリ</sub>

(漢詩名句墨場辞典)

用紙 紅星牌  
筆 和筆・長鋒

矢崎美咲書



—猿丸大夫の歌—

奥山<sub>おくやま</sub>に 紅葉<sub>もみぢ</sub>ふみわけ<sub>三</sub> 希<sub>三</sub> 鳴<sub>那</sub>く鹿<sub>しか</sub>の 声<sub>聲</sub>きく時<sub>時</sub>ぞ<sub>曾</sub> 秋<sub>あき</sub>は悲<sub>八</sub>しき<sub>支</sub>

(かな書作必携)

用紙 和画仙  
筆 和筆・中鋒4号

二月五日締切（草書）

# 漢字規定

半紙縦書

上位・準上位課題

襄帷向九州

奉和聖製暮春送  
朝集使歸郡應制

王維

和す應制

王維

萬國仰宗周

萬國宗周を仰ぎ

衣冠拜冕旒

衣冠冕旒を拜す

玉乘迎大客

玉乘大客を迎へ

金節送諸侯

金節諸侯を送る

祖席傾三省

祖席三省を傾け

襄帷向九州

襄帷九州に向ふ

楊花飛上路

楊花上路に飛び

槐色蔭通溝

槐色通溝に蔭す

來預鈞天樂

來つて鈞天の樂に預り

歸分漢主憂

歸つて漢主の憂を分つ

宸章類河漢

宸章河漢に類し

垂象滿中州

垂象中州に滿つ

玄位く六位課題

萬物知天曙 — 李賀 —

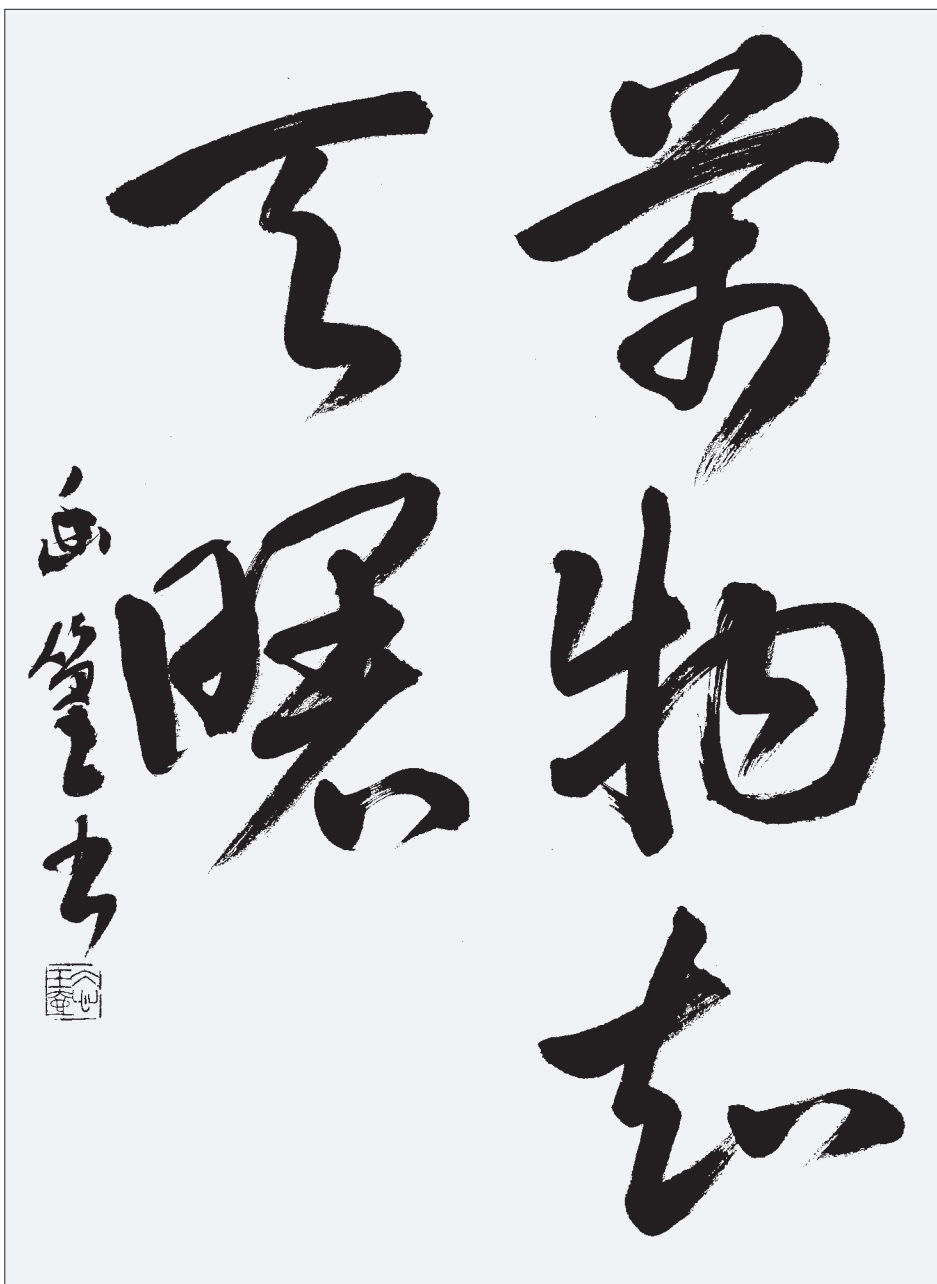
（万物天の曙くるを知る）

万物は夜の明けるのを知った。

参考手本

玄位く六位

長澤幽篁書



萬—三、四画の横画は、長さを反対にしてもよい。

物—牛ヘンは縦長に、ツクリは背を低くする。

知—ツクリの「口」は低めに書く。

天—二画目は少し右寄り、リズムミカルに運筆す

る。

曙—日ヘンの位置に注意する。

次号課題（予告）

47頁参照

二月五日締切

# かな規定

半紙縦書

## 極位・準極位課題

よりあひて 真すぐに立て  
 る 青竹あをたけの 藪やぶのふかみに  
うぐひす 鶯なの啼く

(若山牧水)

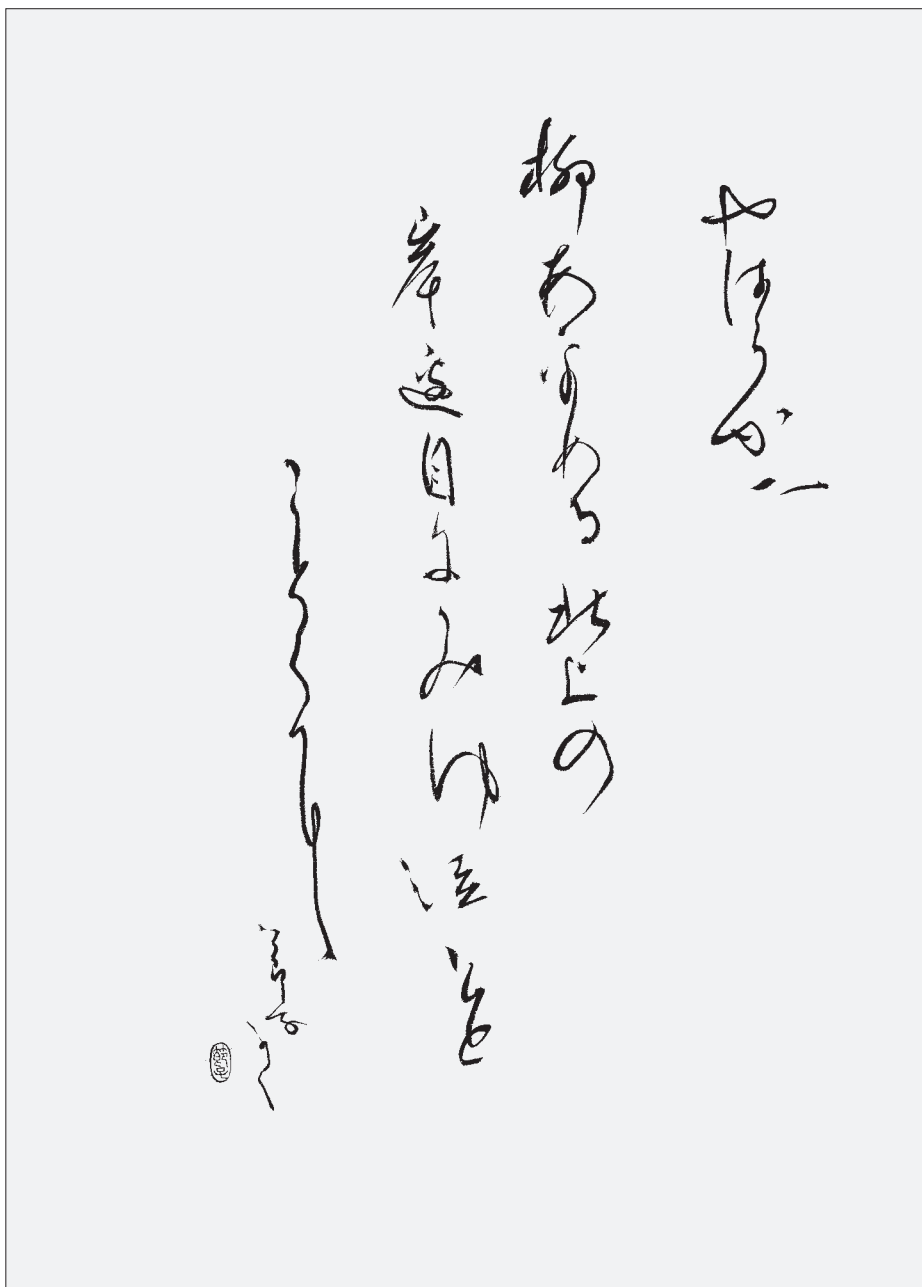
## 妙位〜6位課題

やはらかに 柳二あをめる  
 北上一の 岸辺しづみ目めに見ゆ 泣  
介 けと耳ごとくに

(石川啄木)

次号課題 (予告)  
 47頁参照

※かな漢字相互の変換、ちらし自由。落款は〇〇かく+印。  
 参考手本 妙位〜6位 佐藤節子書







二月五日締切

## 南画規定

※横三五センチ、縦二七センチ（小画仙紙半切五分の一）の用紙を横に揮毫のこと。

### 南画初学講座（一四三）

大久保楓紅

本講座は、これまで書壇誌に掲載された大久保楓紅先生（一九一九～二〇〇二）の作品を参考手本として転載しています。

今月は福寿草を描きます。昔から正月に飾る鉢物として新春を祝うならわしとして使うものです。

この花は背を低く描く事です。描き順は先ずはじめに淡墨で花びらをかきつぎに雌黄、藍、墨をまぜ夢、葉を描きます。次に袴です。筆先に岱赭たいしやに墨をつけて交互に上部から下へと側筆で描きます。墨で葉脈を入れ花を雌黄で芯を岱赭で彩色します。

福寿草ができましたら、墨で石をかき、淡墨でぬり、濃墨で点苔をうちます。最後に草をかき点をうちます。色紙にかけて正月に飾るのも楽しいですね。

讚は「福寿無量」です。

次号課題（予告） 47頁参照

二月五日締切

漢字臨書規定

小画仙紙半切・半紙縦書

参考資料表紙内側

乙瑛碑



細田 秋 僊

は設けず、碑陰に文字はない。

当時、孔子廟では四時の祭祀が行われたが、孔子廟および祭器を常時管理するものがないなかった。そのため、魯国の前の相(朝廷が派遣する王国の執政官)であった乙瑛が、百石卒史を置くことを奏上して、認可された旨を記した碑である。

碑文は、三公が天子に奏上する文、朝廷から郡国に下される詔、郡国から朝廷に奏上する文が細かく記されたものであり、乙瑛その人の頌徳碑ではない。

さて今回の課題は石碑の最後の部分の一五文字の臨書である。以前、隸書体は曹全碑・西狭頌・礼器碑・萊子侯刻石等を担当してきたが、特に、曹全碑などと比べると渾穆な八

乙瑛碑は、後漢の元興元年(一五三)に、いまの山東省曲阜市の孔子廟に立てられ、その孔子廟内の東廡を利用した漢魏碑刻陳列室(通称、孔廟碑林)に現存する。

碑石は二六〇×一二九cm、碑文は一八行、一行四〇字、全文で七六六字からなる。題額

細田 秋 僊 臨 半切参考手本(上位六位)

鮑君造佐百石吏舎功  
垂天窮於是始

秋僊

分ではあるが、やや縦長で間架結構にゆがみがなく、重厚感と軽快感をあわせもち、文字の配列も大らかである。

臨書にあたっては、臨書する箇所欠損は少なく見易いので、原帖をしっかりと熟視し形態やリズムを意識しながら沈潜した運筆で臨してください。好臨を期待します。

筆は和筆三号中鋒・兼毛筆を使用した。

関原玉樹臨 半紙参考手本(上位六位)

造佐百石吏舎

玉樹

次号課題(予告)

48頁参照

二月五日締切

かな臨書規定 伊予切 一 二 半紙縦半切

極位〜2位

左を半紙縦半切に臨書すること

(二玄社 日本名筆選②)



三 多 世 三 多 世 三 多 世  
みわたせば ひらのたかねに ゆき、えて わかなつむべく のはなりにけり

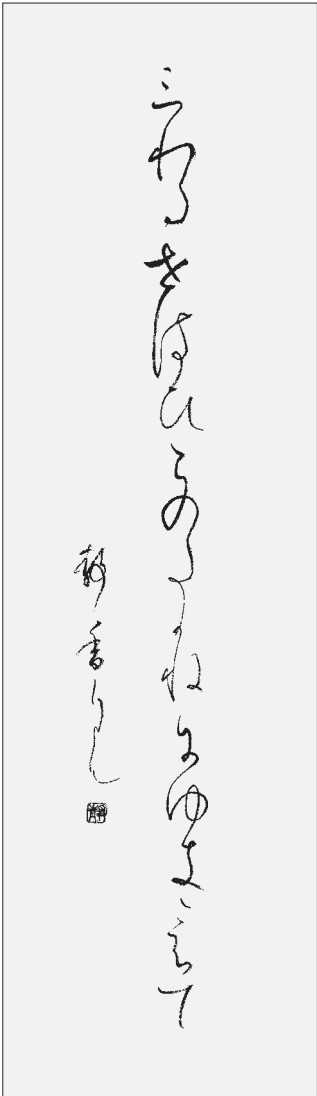
『伊予切』の書風については、謹厳温雅で、明るく、品格の高さを有している、と評されています。課題の歌は、比良の高嶺の残雪も消え、若菜摘むべくあたりは一面に春になったことだ、と詠んだ源兼盛の歌。書き出しの三字連綿が洒脱です。「三」は筆線の太さを三様に書き分け、二句目「た」を伸びやかに。四、五句目「へくの」は字間を取り強めの運筆で。潤滑巧みで、流麗・伸びやかな連綿を駆使した書を再現すべく、丁寧な運筆を心掛けましょう。(星野静代)

3位〜6位参考手本 松原静香 臨

3位〜6位

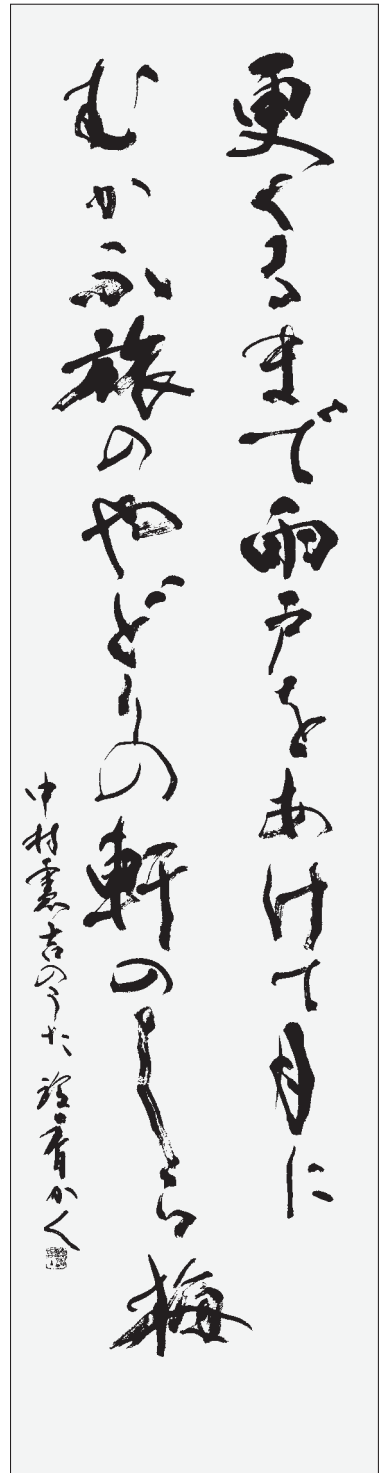
半紙縦半切に臨書すること

三 多 世 三 多 世 三 多 世  
みわたせば ひらのたかねに  
ゆき、えて



次号課題  
(予告)  
48頁参照

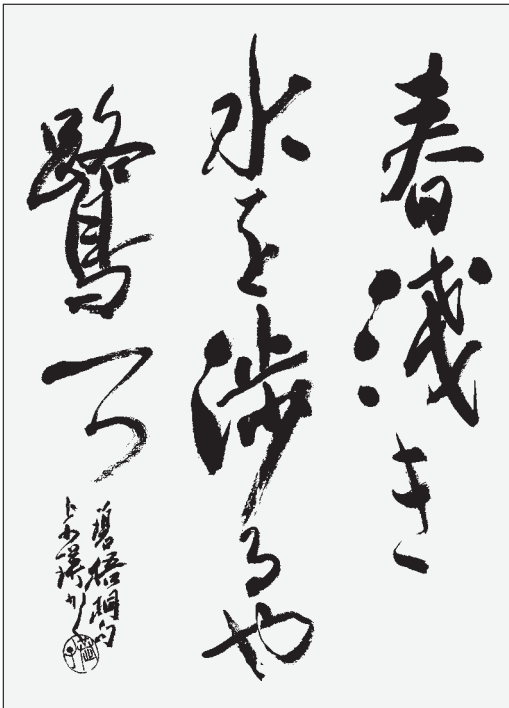
①条幅規定 半切タテ 参考手本 加藤玲香書



更くるまで 雨戸をあけて 月にむかふ 旅のやどりの 軒のしら梅

(中村憲吉)

書線の変化と筆脈の一貫を目指しました。



②半紙規定 タテ

参考手本

小林未瑛書

春浅(浅)き 水を渉るや

鷺一つ (河東碧梧桐)

③半紙随意 書体・文言自由。半紙ヨコ

次号課題  
(予告)  
47頁参照

# 篆刻入門

(二六三)

益満丁まきみつてい 盦あん

## 《応募作品アドバイス》

今月の課題は「鑑止水」でした。非常に座りの悪い印文で、止と水の処理が極めて難しく、私も苦心しましたが、みなさんの作品は私の作例より完成度が高かったように思います。

○賢さん、伝統的な良い作品です。四隅を枠で守り、辺縁中央部を切って緊張感をバランスさせる手法も見事です。止の上部を鑑の皿に接触させて文字の安定を図っています。

○青紗さん、温和で落ち着きのある作品です。彫りがやや浅い感じがしますので、刻し終わったら改めて線のギリギリのラインに刀を当て、深く切り、底浚えも深くしてみてください。それだけで不思議と印影が冴えて参ります。

○玄松さん、鑑(鑒)を二文字

に見せ、止と水で四字句に見立てた手法、お見事です。印泥が乾く前に紙を折ったため、ご所属の部分が汚れておりました。当て紙を当てるか、一度紙を被せて軽く撫でて余分な印泥を取った方が宜しいかと思えます。

## 【留意】

篆刻課題は「歸徳尉印」でした。蘭陽さん、意臨と拝察しました。刀が生きており文字も動きがあり、凛としたさわやかさを感じます。

二月五日締切課題

○規定「羨魚」

○留意(または摹刻を含む)

○印は3cm以内、摹刻は原印大とします。

○51・52頁応募規定をご覧ください。

※出品票を貼ったバーコード券を必ず貼付してください。

規定参考 益満丁 盦作



羨魚(魚を羨む)ただ魚を欲しがって見ていること。「臨淵羨魚」より。



堀 流芳



小林 賢



石本 青紗



真田 玄松

摹刻参考



新陽長印



柴 蘭陽

三月五日締切規定予告

「恭則壽」